

文学作品解釈の認知プロセス

— 文学性の認知図式 —

橘 高 眞一郎

〔抄 録〕

人間の言語活動の最も重要な産物の一つが文学である。しかし、文学性とは何かと問われると、途端に返答に窮してしまう。現在のところ認知科学では、文学性とは一般的認知機構の阻害克服過程で読者の心中に喚起された審美的感情群と考えられており、その過程を説明するずれの解消モデルが提唱されている。本稿では、主にユーモアやジョークを分析対象としているこのモデルをベースに、文学作品中の言語表現によるメトニミー・リンクが喚起する複数のドメインのブレンディングによる日常的推論からの意図的なずれが認知的負荷を与え、焦点シフトによるずれの克服過程で審美的感情群が生じると論じて、文学作品解釈の認知図式を提示する。文学作品解釈の背後には、認知的無意識とでも言うべき複雑な認知プロセスがあるが、メトニミー・リンク、ブレンディング、焦点シフトは、そうした認知プロセスの一部として機能している。

キーワード メトニミー・リンク、ドメイン、ブレンディング、意図的なずれ、
焦点シフト

1. はじめに

長い間、単なる言葉の彩 (figure of speech) と考えられてきたメタファー (metaphor) やメトニミー (metonymy) は、20世紀後半から急速に発達し始めた認知言語学によって、人間の重要な認知能力 (cognitive ability) の一つと考えられるようになった。George Lakoff と Mark Turner は、メタファーとメトニミーが単なる修辞法 (rhetoric) ではなく、身体的経験に根ざした、概念体系 (conceptual system) の基盤であることを高らかに宣言した。

We have found... that metaphor is pervasive in everyday life, not just in language but in thought and action. Our ordinary conceptual system, in terms of which we both

think and act, is fundamentally metaphorical in nature. (Lakoff and Johnson 1980: 3)

..., metonymic concepts structure not just our language but our thoughts, attitudes, and actions. And like metaphoric concepts, metonymic concepts are grounded in our experience. (Lakoff and Johnson 1980: 39)

しかし彼らにおいてすら、メタファーとメトニミーの扱いは対等ではなかった。メタファーとメトニミーを修辞学の呪縛から解放した彼らの著作がメトニミーに割いたのは、たった5ページに過ぎなかった。メトニミーに対する関心が漸く高まってきたのは20世紀も終わり頃になってからである。長い間、メタファーの背後に隠れていたメトニミーではあるが、最近、メタファーよりもより基本的な人間の認知能力として注目を集めている。

Recent work in cognitive semantics..., has argued that metonymy may be more basic than metaphor and may motivate metaphor. (Evans 2007: 142)

本稿は、メトニミー・リンク (metonymy link)、ブレンディング (conceptual blending)、焦点シフト (focus shift) という人間の基本的認知機構を手掛かりにして、O Henry の “The Gift of the Magi” 「賢者の贈りもの」という短編が、どのようにして文学性を生じているのかを考察したものである。もちろん筆者は、文学作品を認知科学 (認知言語学) で分析できるのか、という批判があることは承知している。しかし「どのような凡庸な読みであっても、背後には意識されない「認知的無意識」としての複雑で膨大なプロセスの集積がある」(浜田 2010: 20) ということは紛れもない事実である。本稿で試みる認知言語学的手法による文学作品の分析は、まさしく次のような考えによるものである。

…認知言語学的な文学作品の説明とは、作品のある側面を部分的にであれ理論的予測の結果として、つまり認知プロセスのもたらしたものとして導くことができる、ということの意味するだろう。(浜田 2010: 20)

本稿では、ずれの解消モデル (cf. 内海 2007: 407) をベースに、次の順序で文学作品解釈の認知プロセスを説明する。

- (1) 言語表現→メトニミー・リンク→ドメインの喚起 (日常的推論)
- (2) ブレンディング→融合ドメインの創出 (日常的推論)
- (3) 意図的なずれ→認知的負荷 (日常的推論の却下)

(4) 焦点シフト→認知的負荷の軽減 (認知的ずれの克服・再解釈)

*本稿の図は、5と6を除き、全て筆者による。

2. メトニミー・リンク

メトニミーとは、事象 (entity)¹ を事象² で指示する参照機能 (referring function) のことで、メトニミー・リンクとは、事象¹ と事象² を関係づける (リンクする)、空間的 (spatial)、時間的 (temporal)、特性的 (abstract) な関係をいう (cf. Seto 1999: 98)。メトニミー・リンクの中で、認知的に際立つ (salient) ために言語化された事象¹ は参照点 (reference point: RP)、言語化されてはいないが、話者が暗に意図している事象² はターゲット (target: T) と呼ばれる。例えば、“The kettle is boiling.” という時、沸いているのは kettle の中にある water であるから、kettle という事象¹ (RP) で water という事象² (T) を参照しているが、それは、water よりも kettle のほうが認知的に際立つからである。

メトニミーの中でも、特に部分全体関係 (part-whole relationship) を、隣接関係 (contiguity) と区別して、シネクドキー (synecdoche) と呼ぶことがある。例えば、「新顔」で「新人」を表す場合などは、人体の一部の「顔」で人体全体を参照している。

A subcategory of metonymy is synecdoche; here, reference to the whole is made by reference to a salient part: *We need some new faces around here.* (Taylor 2003³: 125)

Metonymy is closely related to the notion of synecdoche. In fact, metonymy and synecdoche are not always clearly distinguishable, since both figures exploit the relationship of larger entities and lesser ones. Synecdoche substitutes the part for the whole, and its terms of reference are concrete. For example, people often substitute *hand* for *worker*, *head* for *person*, and *door* for *house*. (Gibbs 1994: 322)

研究者によってはシネクドキーとメトニミーを厳密に区別するが (cf. Seto 1999)、本稿では、シネクドキーはあくまでメトニミーの下位範疇 (subcategory) と考え、広義のメトニミー・リンクに含めて扱うことにする。

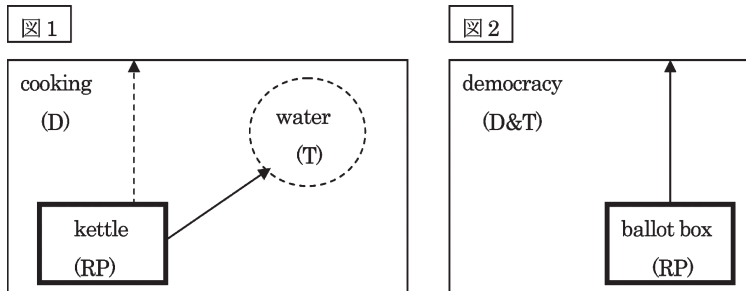
メトニミーの参照機能には制約がある。メトニミーによってリンクされる二つの事象は、同一のドメイン (概念領域: conceptual domain: D) になくなくてはならない。先の例における kettle で water のメトニミーは、例えば「調理」という同一ドメインにあって始めて成り立つ。同一ドメインにあることが、参照点からターゲットを推論することを可能にしている。(図1参照)

Metonymy involves only one conceptual domain, in that the mapping or connection between two things is within the same domain. (Gibbs 1994: 322)

この同一ドメインという制約を守ってれば、メトニミーはかなり融通がきく。例えば、pen で author を、the ballot box で democracy を、the bullet で terrorism をリンクすることさえできる。これらの例では、メトニミーは、参照点である具体的事象（部分）でターゲットであるドメイン（全体）を参照している。重要なことは、ターゲットは、参照点とリンクしたドメイン中のある事象であっても、あるいはドメイン自体であってもよいということである。

(図2 参照)

Metonymy,..., substitutes the token for the type, or a particular instance, property, or characteristic for the general principle or function. Its terms of reference often bridge the abstract and the concrete. For instance, people often substitute *pen* for *author*, *the bench* for *the law*, *the flag* for *command*, *the ballot box* for *democracy*, *the crown* for *the royal government*, and *the bullet* for *terrorism*. (Gibbs 1994: 323)



また人間は、一連の行動や出来事 (series of events) の中の際立った一部分 (subpart) に言及するだけで、一連の行動や出来事の全体を理解することができる。こうした理解はスクリプト (script) と呼ばれる日常生活の構造化された知識に依存している。

People's knowledge in long-term memory of coherent, mundane series of events can be metonymically referred to by the mere mention of one salient subpart of these events. We see that the mention of the subpart metonymically stands for the whole event. (Gibbs 1994: 330)

例えば、“She can hardly get out of bed.”と言うだけで、She is seriously ill. と推論できるのは、その表現が病気スクリプト (①病気になる→②寝込む→③重態になる→④起き上がれない) の④に相当し、それが参照点となって③がターゲットとしてリンクされるからである。こ

の場合、病気スクリプト全体がドメインになっていると考えられる。(図3参照)

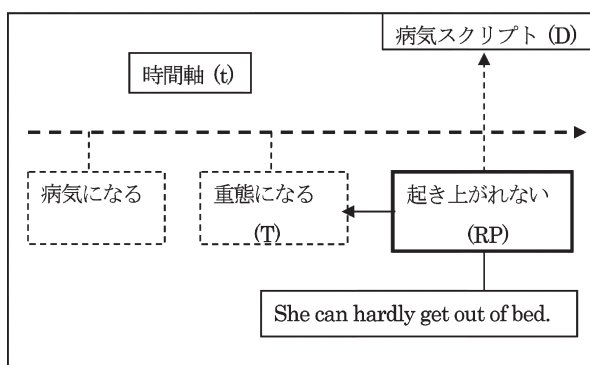
このように、メトニミー・リンクは、ある認知的に際立った事象を手掛かりにして、それが属しているドメイン全体やその中に含まれる別の事象を推論するメカニズムとして機能している。更に含意 (implicature) の推論にもメトニミー・リンクが関わっている。例えば、間接発話行為 (indirect speech act) の解釈について、崎田・岡田は、次のように述べている。

例えば相手にある行為をしてくれるように頼む場合に、その行為を直接言語化せずとも、コンテキストさえ明確に共有されていれば当該行為を特徴づける条件の一部を言葉にするだけでも話者の意図が間接的に伝わる。(崎田・岡田 2010:189-190)

彼らの説明によれば、「この問題が解けますか」という疑問の発話が「この問題を解いて下さい」という依頼の発話に解釈されるのは、聞き手の問題解決の能力という「発話行為の成立に必要な条件の言語化を参照点として認知し利用することで、ターゲットとしての発話行為の解釈を得る」(崎田・岡田 2010:190) からである。

言語化されている情報が極端に少ない(極度に発話事態に依存した)一語発話のような発話の解釈にも、メトニミー・リンクによる推論が不可欠である。崎田・岡田(2010:192-193)の説明を借りれば、A「明日はちゃんと学校に来るんだぞ」 B「わかった」という対話でのBの一語発話「わかった」の解釈は、①(ちゃんと話を聞いているから/自分もそう思ったから/学校に来た方がよいことが)→「わかった」、②「わかった」→(だから必ず学校に行きます/だからもう放っておいてくれ/だから心配しないで)、③(Bはちゃんと話を聞いているから/ Bは物わがりのいい子だから)→「わかった」(とBは言っている)、④「わかった」(とBは言っている)→(だからbは明日学校に来るだろう/ だけどBは学校に来ないだろう)、のように、メトニミー・リンクによる推論によって、様々な解釈が可能になる。

図3



メトニミーは、決して単純な言い換えでもなく、いい加減で大雑把な表現でもなく、認知的な際立ちのある事象を手掛かりにして、あるドメインや発話事態を参照にした認知プロセスである。またメトニミー・リンクによる推論は百科事典的知識（encyclopedic knowledge）、つまり暗黙の前提、を参照して行われているので、日常的推論である（非明示的前提も含む日常的推論は、明示的前提だけの論理的推論とは区別される）。

3. ブレンディング

日常のコミュニケーションにおいて、人々は認知的に際立ったある事象（言語化された事象）を参照点としたメトニミー・リンクによる推論によって、それが属するドメイン自体や同一ドメインの別の事象というターゲットにたどり着くことができる。しかし文学作品では、複数のドメインがブレンディングして融合ドメインが創出されている。融合ドメインには、それが由来する既存ドメインの要素以外の新しい要素が加えられている。換言すれば、融合ドメインは、それが由来する既存ドメインの要素の総和以上のものである。認知言語学では、人間の思考や想像力の中心がブレンディング（conceptual blending: 概念融合）だと考えている（... conceptual blending is central to human thought and imagination,... (Evans and Green 2006: 401)）。従って文学作品解釈においては、メトニミー・リンクと同様にブレンディングも重要な認知プロセスである。

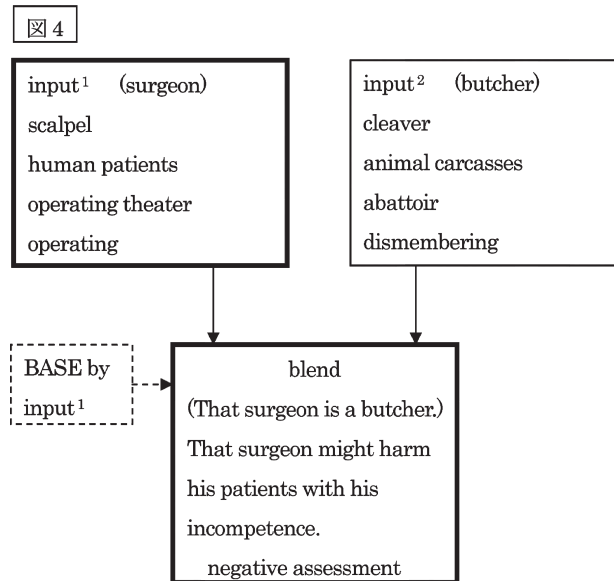
ブレンディングとは、複数（通常2つ）の入力スペース（input space: input）の要素が、融合スペース（blended space: blend）に継承（inherit）され融合されることで、由来する入力スペースに存在しなかった融合スペース独自の要素が創出される、というものである。例えば、breakfast と lunch を融合すると brunch になるが、brunch には breakfast や lunch には存在しなかった新たな要素が創出されている。

The integration of two or more spaces into a “blended space” is known as conceptual blending. A blended space inherits partial structure from its input spaces and has emergent meaning of its own. Blending is well-known as a word formation process. For example, the word brunch is morphologically composed of breakfast and lunch. Semantically, certain elements of the input spaces ‘breakfast’ and ‘lunch’ are projected into the blended space and some additional meaning emerge. For instance, a brunch is typically served in a restaurant and may include alcoholic drinks such as champagne. (Radden and Dirven 2007: 31)

The structure in the blend is ‘emergent’ because it emerges from ‘adding together’

structure from the inputs to produce an entity unique to the blend. (Evans and Green 2006: 405)

ブレンディングを “That surgeon is a butcher.” というメタファーをもとに考えてみよう (cf. Evans and Green 2006: 401-402)。まず入力スペースとして surgeon と butcher がある。どちらの入力スペースもそれ自体は高度な専門知識と技術を必要とする職業で、マイナス要素はない。ところが、これらが融合すると (That surgeon is a butcher.)、融合スペースには入力スペースにはなかったマイナス要素である無能 (incompetence) が創出される。これについて筆者は、融合スペースが形成される時、2つの入力スペースが全く対等に融合されるわけではなく、一方の入力スペースが基盤 (base) となって、そこにもう片方の入力スペースの要素が写像 (mapping) されるからだと考えている。Surgeon の基盤に、butcher の要素である cleaver や dismembering、そして animal carcasses が写像されれば、「この外科医は、人体を切り分けるだけの無能な外科医だ」という推論をすることは容易である。つまり、ブレンディングによる推論も日常的推論なのである。(図4参照)



なお、上記のブレンディングの説明では、ドメイン (conceptual domain: 概念領域) の代わりにスペース (space) という用語を用いたが、本来スペースはオンライン的概念領域 (dynamic) であり、ドメインは固定化された既存の概念領域 (static) である (cf. Evans and Green 2006: 403)。本稿で言及するのは、予め読者の頭の中にある概念領域なので、ドメインという用語 (本稿の図では D と表示) を一貫して用いている。

4. 焦点シフト

これまで、メトニミー・リンクによって喚起された複数のドメインがブレンディングすることによって融合ドメインが創出される、と述べてきた。しかし、メトニミー・リンクもブレンディングも、程度の差こそあれ、日常的推論に過ぎないので、そこから読者の得られる解釈は、いわば予測可能な平凡なものなのである。では文学作品から読者の得ることのできる審美的感情群（文学性）はどのようにして生じるのだろうか。

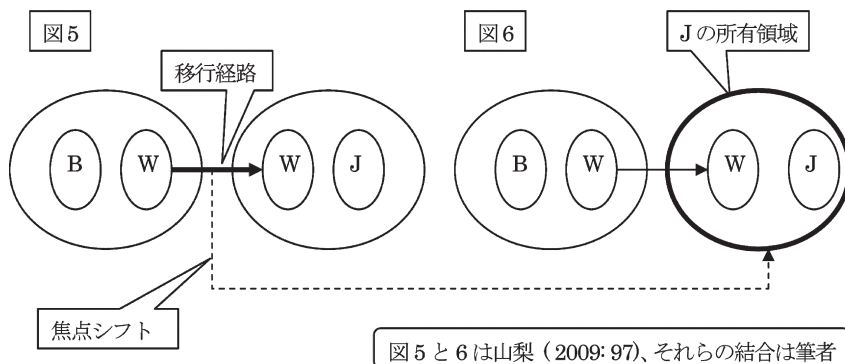
認知科学（cognitive science）の分野では、読者の心中に審美的感情群を喚起するものは、一般的認知機構の阻害克服の過程だと仮定して、その過程を説明するずれの解消モデル（incongruity resolution model）が提示されている。

…詩的・情動的効果の認知機構（…）の一般原理として、以下に示すずれの解消モデル（incongruity resolution model）を考える。

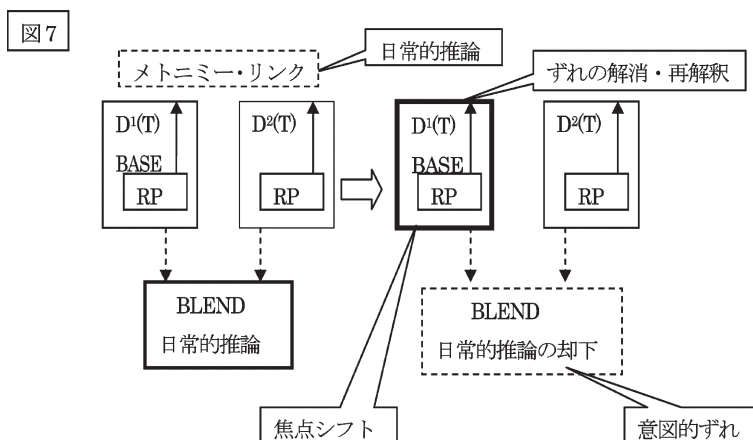
1. 表現技法に基づいて生じる意図的なずれによって、受け手に認知的負荷（処理労力、心理的緊張）が生じる。
2. 認知的負荷を軽減するような（部分的にずれを解消するような）豊かで多様な解釈を得ることによって表現効果が生じる。（内海 2007：407）

このモデルは、もともと個々の文学的表現（主としてユーモアやジョーク）の分析のために提案されたものであるが、筆者は物語全体の分析にも適用できると考えている。筆者は、物語についての平凡な日常的推論が却下された時、受け手に生じた認知的負荷を軽減するような新たな解釈（再解釈）を得ることで審美的感情群（文学性）が生じるが、その際、焦点シフトという認知プロセスが認知的負荷軽減をするような再解釈を可能にすると考えている。

焦点シフトは、イメージ・スキーマ（image schema: 認知図式）を変換することなく、焦点部分を移動にすることによって、イメージ・スキーマの変容を引き起こす認知プロセスである。例えば、今までパラフレーズの関係にあると考えられてきた与格構文 “Bill sent a walrus to Joyce.” と二重目的語構文 “Bill sent Joyce a walrus.” は、イメージ・スキーマのベースは同じであるが、与格構文の場合、Bill (B) から Joyce (J) へ移動する walrus (W) の移行経路が焦点化され（図5参照）、二重目的語構文の場合、walrus の移動先の Joyce の所有領域が焦点化されており（図6参照）、両者は認知的に異なる事態解釈を反映している（二重目的語構文の場合、walrus が Joyce に渡ったことが含意される）。このように、同一のイメージ・スキーマの中で、認知的に異なる事態解釈を反映して、焦点を当てる部分を変えることが焦点シフトと呼ばれる認知プロセスである（cf. 山梨 2009：97-98）。



筆者は、以下に示す文学作品解釈の認知図式(図7参照)において、作者によって意図的に生じさせられた認知のずれという認知的負荷が、焦点シフトというずれ克服のストラテジーによって軽減され、読者は再解釈を得る、と考えている。



5. 作品分析

O Henry の代表的な短編の一つである “The Gift of the Magi” のあら筋は次のようである。

粗末なアパートにジムとデラという若い夫婦が暮らしていた。クリスマスも近づいたある日、妻デラは夫ジムの金時計にふさわしい鎖をプレゼントするために、自慢の長い金髪を売る。一方、ジムはデラの自慢の金髪にふさわしい鼈甲の櫛をプレゼントとしようと、自分の金時計を売る。クリスマスの日、二人はお互いのプレゼントを交換して、自分たちの思惑が行違ったことを知って啞然とする。

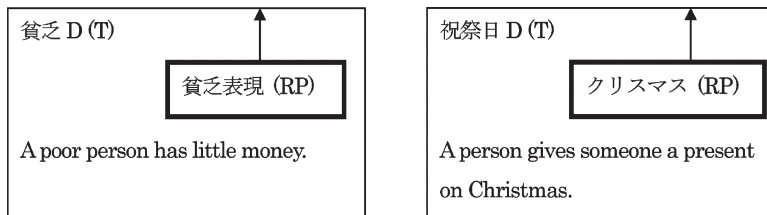
まず物語の最初に、次のような貧乏に関わる表現（以下、貧乏表現）が現れる。

ONE DOLLAR AND EIGHTY-SEVEN CENTS. That was all. And sixty cents of it was in pennies.... Three times Della counted it. One dollar and eighty-seven cents. And the next day would be Christmas. (1) *大文字は原文のまま。

To-morrow would be Christmas Day, and she had only \$1.87 with which to buy Jim a present. She had been saving every penny she could for months, with this result. Twenty dollars a week doesn't go far. Expenses had been greater than she had calculated. They always are. Only \$1.87 to buy a present for Jim. (1-2)

このように言語化された貧乏表現を参照点にして、読者はまず頭の中にある貧乏ドメインを喚起する。貧乏ドメインのプロトタイプ (prototype) は「貧乏人には金がない」であろう。また同時に、クリスマスという語を参照点にして祝祭日ドメインも喚起される。百科事典的知識から、読者は「クリスマスにはプレゼントをする」ことを知っており、それが祝祭日ドメインのプロトタイプであると考えてよいと思われる。(図8参照)

図8



次にデラがジムにクリスマス・プレゼントをするために自分の大切な長い金髪を売ろうとして苦悩する様子とプレゼントをするためのお金を手に入れて彼女が喜ぶ様子が描かれる。

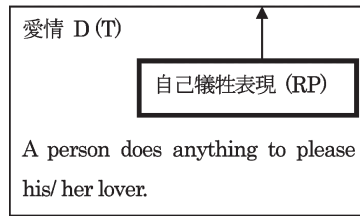
So now Della's beautiful hair fell about her, rippling and shining like a cascade of brown waters. It reached below her knee and made itself almost a garment for her. And then she did it up again nervously and quickly. Once faltered for a minute and stood still while a tear or two splashed on the worn red carpet.... With a whirl of skirts and with the brilliant sparkle still in her eyes, she fluttered out of the door and down the stairs to the street. (2)

Oh, and the next two hours tripped by on rosy wings. Forget the hashed metaphor.

She was ransacking the stores for Jim's present. (3)

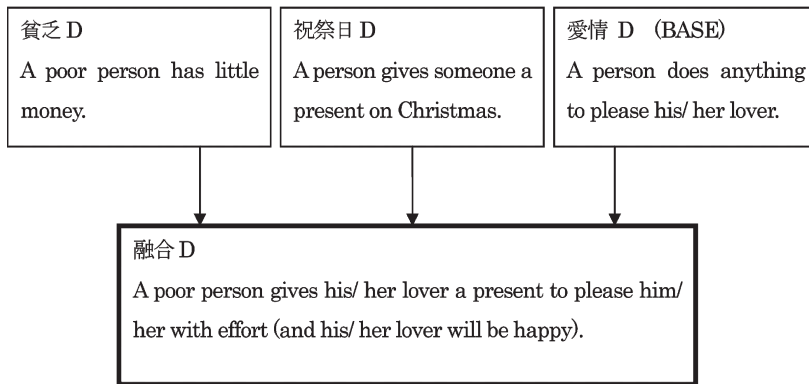
自分以外の者の喜びのための自己犠牲の行為は、愛の最も純粋な姿である。読者は言語化された自己犠牲表現を参照点にしてターゲットの愛情ドメインを喚起する。このドメインのプロトタイプは「人は愛する者を喜ばせるためには何でもする」であろう。(図9参照)

図9



ここまでがこの物語の前半である。この段階で、読者の頭の中では、喚起された3つのドメインがブレンディングされて融合ドメインが出来上がる。ブレンディングは日常的推論であるから、融合ドメインも読者に心理的衝撃を与えるようなものではない。(図10参照)

図10



この融合ドメインのベース (base: 基盤) は、愛情ドメインである。具体的・特定の貧乏ドメインや祝祭日ドメインと比べて愛情ドメインは明らかに一般性・抽象度が高く、それらよりも上位レベルにある。「貧乏人はお金がない」や「クリスマスにはプレゼントをする」には、これ以上の解釈の余地はあまりないが、「人は愛する者のためには何でもする」には、多くの解釈の余地がある。文学作品解釈に際して、読者がより上位レベルのドメインを解釈の基盤に選ぶことは当然であろう。そして愛情ドメインをベースにした融合ドメインは、この段階での認知の焦点となっている。読者は、この段階で、このドメインの中に創出された推論が物語の中で実現すると考えているからである。

しかしここで、作者によって認知的ずれが企てられる。デラとジムの互いのプレゼントは行き違って、「愛する人がプレゼントをもらって幸せになる」という日常的推論は却下される。

‘Don’t make any mistake, Dell,’ he said, ‘about me. I don’t think there’s anything in the way of a haircut or a shave or a shampoo that could make me like my girl any less. But if you unwrap that package you may see why you had me going awhile at first.’

White fingers and nimble tore at the string and paper. And then an ecstatic scream of joy; and then, alas! a quick feminine change to hysterical tears and wails, necessitating the immediate employment of all the comforting powers of the lord of the flat. (4)

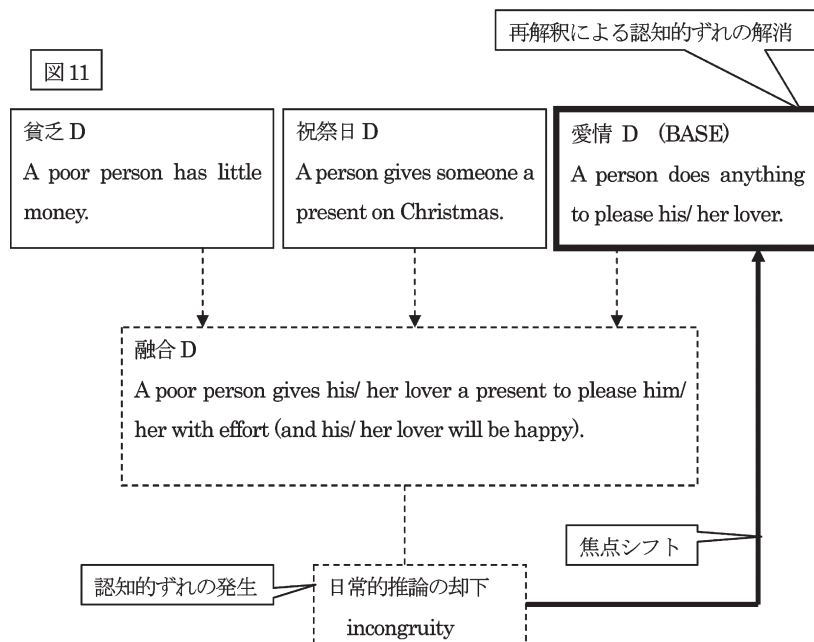
Instead of obeying, Jim tumbled down on the couch and put his hands under the back of his head and smiled.

‘Del,’ said he, ‘let’s put our Christmas presents away and keep ‘em awhile. They are too nice to use just at present. I sold the watch to get the money to buy you combs. And now suppose you put the chips on.’ (5)

愛する人を喜ばせようと思って無理をして作ったお金で買ったクリスマス・プレゼントの結末が、読者が推論したようにはならなかったとわかった時点で、読者は心理的衝撃、つまり認知的負荷、を受ける。融合ドメインの日常的推論が却下されたということになれば、途方に暮れた読者はその一つ前の段階、つまり3つのドメインの日常的推論に戻るしかない。この時、読者は再解釈可能性のより高い上位レベルにある愛情ドメインの日常的推論「人は愛する者のために何でもする」に認知の焦点をシフトする。そして、「たとえ結果が思わしくなかったとしても、愛する者のために出来る限りのことをしたのだ。それが愛の純粋な姿だ」と再解釈することで、審美的感情を味わうことができるのである。(図11参照)

さて読者のそうした再解釈は、作者の意図にかなったものであったのだろうか。作者は次のような文章でこの短編を締め括っている。

And here I lamely related to you the uneventful chronicle of two foolish children in a flat who most unwisely sacrificed for each other the greatest treasures of their house. But in a last word to the wise of these days, let it be said that of all who give gifts these two were the wisest. Of all who give and receive gifts, such as they are wisest. Everywhere they are wisest. They are the magi. (5) *下線部は筆者。



締めくくりの部分で、作者は、自分の最も大切な宝物を犠牲にした彼らこそ賢者である、と述べている。もしも作者の言いたいことが、お互いに相手を喜ばせようとした贈りものが、お互いに無意味なものであったことは愚かなことであったかも知れないが、彼らの本当の贈りものは愛そのものであった、ということならば、読者が愛情ドメインに焦点シフトして再解釈したことは正解ということになる。

6. おわりに

本稿では、文学作品解釈にメトニミー、ブレンディング、焦点シフトという人間の認知機構がどのように関わっているのかを検証した。具体的には、ずれの解消モデルをベースにした認知図式を用いて、メトニミー・リンクによって喚起された複数のドメインのブレンディングから生じた融合ドメインの日常的推論が意図的なずれによって却下された結果、認知的負荷が生じ、それが焦点シフトによって解消されて再解釈が行われることにより審美的感情群（文学性）が得られると論じた。

その際、複数のドメインのブレンディングにおいて、より上位レベル（より一般性・抽象度の高いレベル）のドメインがベースになると主張したが、それは本稿が分析対象としている文学作品が人間の想像力が生み出したものであり、抽象的思考の産物だからである。しかしこの主張は筆者の仮説に過ぎず、現段階ではとても一般化することはきかない。今後もこの件については研究を続けていくつもりである。（因みに、“The surgeon is a butcher.” で surgeon が

ベースになるのは、それがこのメタファーの主語で、補語の butcher よりも認知的際立ちがあるからである。）

通常のメトニミー・リンクの研究では、語句のみを参照点として扱っている。しかし本稿では、文学作品におけるメトニミー・リンクの参照点を、語句よりも、あるまとまった内容を表す文章にしている。文学作品の分析においては、文章というより大きな単位を参照点としなければ、メトニミー・リンクを認知することは困難だからであり、この点は筆者独自の工夫である。（本稿で分析した短編において参照点となった語句は Christmas だけで、他は「貧乏表現」とか「自己犠牲表現」といった文章であった。）

最後に、本稿がベースにしたずれの解消モデルは関連性理論（Relevance Theory）を理論的背景に持っている。関連性理論は、詩的效果（poetic effect：文学性と言い換えてもよい）とは弱い推意（weak implicature）の束であり、潜在的な推意の幅が広ければ広いほど、またそれを作り出すのに読者の関わりが大きければ大きいほど、より大きな詩的效果が達成されると主張しているが（もっとも、関連性理論ではメタファー表現の分析にとどまっているが）、その主張には、人間の認知機構という視点が大きく関係している。関連性理論も、広義での認知言語学と言えるだろう。

Poetic effects, we claim, result from the accessing of a large array of very weak implicatures in the otherwise ordinary pursuit of relevance. (Sperber and Wilson, 1995²: 224)

In general, the wider the range of potential implicatures and the greater the hearer's responsibility for constructing them, the more poetic the effect, the more creative the metaphor. (Sperber and Wilson, 1995²: 236)

認知言語学は傾向の学問であって、純然たる自然科学のような絶対的真理は存在しない、と筆者は考えているが、いろいろな現象の中からある傾向を見つけ出して、その妥当性を検証することは有益である。従って、文学を含めた人間の言語活動の研究には、今後、ますます認知言語学の知見が取り入れられてくるだろう。認知言語学的分析手法は、文学性を解明する魔法の杖（magic wand）ではない。しかし文学性という得体の知れない怪物に立ち向かう短剣（dagger）にはなるはずである。

〔使用テキスト〕

O Henry. "The Gift of the Magi." *O Henry 100 Selected Stories*. Hertfordshire: Wordsworth, 1995.

〔引用文献〕

- 内海 彰. 2007. 「認知修辞学における比喩の認知過程の解明」 楠見孝 (編) 『メタファー研究の最前線』 403-420. 東京: ひつじ書房.
- 崎田智子・岡本雅史. 2010. 『言語運用のダイナミズム』 東京: 研究社.
- 浜田 秀. 2010. 「認知物語論の可能性—言語研究から見た—」 西田谷洋・浜田 秀・日高佳紀・日比嘉高 『認知物語論キーワード』 16-24. 大阪: 和泉書院.
- 山梨正明. 2009. 『認知構文論—文法のゲシュタルト性』 東京: 大修館.
- Evans, V. 2007. *A Glossary of Cognitive Linguistics*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Evans, V., Green, M. 2006. *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Gibbs, R. W. Jr. 1994. *The Poetics of Mind: Thought, Language and Understanding*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lakoff, G., Johnson, M. 1980. *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Radden, G., Dirven, R. 2007. *Cognitive English Grammar*. Amsterdam: John Benjamins.
- Seto, K. 1999. Distinguishing Metonymy from Synecdoche. In *Metonymy in Language and Thought*. eds. Panter, K. and Raddeen, G. 91-120. Amsterdam: John Benjamins.
- Sperber, D., Wilson, D. 1995² [1986] *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.
- Taylor, J. R. 2003³. [1989] *Linguistic Categorization*. Oxford: Oxford University Press.

(きったか しんいちろう 英米学科)

2010年9月21日受理